

26【街の散策からの気づき発見】

江戸川散策3「宝珠花橋」

会員 K.T.

春の「街の散策」を開始している。龍Q館から江戸川の堤防を3kmほど上流に、「宝珠花橋」がある。この橋は昭和29年(1954)に着工、昭和33年(1958)に竣工した。橋の延長405.5m、幅5mの橋で、昭和49年(1974)金野井大橋ができる前まで、江戸川を挟む千葉県と埼玉県をつなぐ重要な橋であった。江戸川は、江戸時代・寛永期(1624～1643)に下総台地を開削された河道である。春日部指定文化財になっている「小流寺縁起」に江戸川開削以前の庄和地区の様子が記されている。

「原野平壙(へいこう)にして川沢西に列す。」

平坦な沖積低地に河川が乱流し、旧河道などの沢沼が点在していた。毎年7月、8月になると、増水によって川があふれ水害になって人が住めない土地であったようだ。『春日部市史・庄和地区』平成25年(2013)から咀嚼し、引用すると、

「江戸川開削後は、川の流路が安定し、水田開発の用悪水路が整備され、新田開発が進んだ。下総台地上にあった親野井・宝珠花・金野井は、新河道によって東西に分断された。正保期(1644～1647)の新田開発は西親野井・西宝珠花・塚崎・西金野井・大袋・米島・小田辺(現・東中野)・木崎・倉常・神間・金崎・永沼・上柳・下柳・米崎・水角・飯沼・赤崎・芦橋・榎・櫛・立野・吉妻・小平である。(後略)」

現在の庄和地区の原形は江戸時代に形成されたことがわかる。江戸川の開削後、東北や北関東地方からの物資は、利根川・鬼怒川を経て、関宿(現・野田市関宿)から江戸川を通して、江戸へ運ばれた。このような水上交通の発展のなかで、河岸の成立については不明ながら西宝珠花や東宝珠花(千葉県野田市)、西金野井河岸は、近隣の村々からの物資中継点として発展した。船頭・水夫、商人、旅人が集まる河岸場には遊楽も存在した。船宿には表向きは召使の身分で遊女を置いていた。こうした状況は、舟人を滞留させ、風紀を乱し、治安悪化要因の一つになるとして、領主からときどき、取り締まりを受けていた。西宝珠花河岸も文政5年(1822)舟宿六軒が一斉摘発を受けた記録が残っている。西宝珠花河岸には、多くの人々が集まり、いろいろな事件が起こり、賑わっていたのだろう。今は、人々の喧噪やこれらの歴史は河川敷や河道の下に眠っている。江戸川の堤防を散策しながら、この地の歴史と対談をするのも散策の楽しみである。

現在、江戸川の堤防の上から見ている西宝珠花の地域は、大きくは2度の変革を受けてきた。一つは良く知られている江戸川開削による地域の東西分断、もう一つは昭和の江戸川改修に伴う、地域移転である。

昭和22年(1947)カスリーン台風による大水害は堤防の決壊や越水で濁流が市街地に流れ込み、利根川・江戸川・中川流域の埼玉県東部、東京都に甚大な被害をもたらした。この水害対策から利根川水系の大規模改修計画が立案された。これにより、宝珠花村は全戸数の75%、250戸が移転の対象となった。宝珠花村は河川敷として村の3分の1の面積、3万2千坪が買収された。移転事業は昭和25年(1950)から始まり、2ヶ年間に要した。移転は、曳家(建物を解体せずに移転)、移築(建物を解体して移転場所に移し、再び建てる)、新築の方法で実施された。地域の人々による「移転組合」、移転業者側は「事業完遂協力組合」を結成し、街並み、道路整備、代替地、改修工事に伴う用排水の新設・補修等、さまざまな問題を乗り越え、移転棟数500、業者数21、従業員数200余名による大事業を遂行したという。この移転後の河川敷は、毎年5月3日・5日に、国の無形文化財に選択されている百畳敷きの「宝珠花の大凧」揚げ会場に使われている。



宝珠花橋と江戸川



宝珠花地区(昭和23年)

宝珠花地区(令和3年)

写真提供:国土地理院

加工:春日部市

図文化財保護課(内線4834)